

保育実習Ⅱの「振り返り」と「課題」についての一考察

長 谷 秀 揮

四條畷学園短期大学

A Study of the “challenge” and “look back” of learning in child care and education training Ⅱ

Hideki Hase

Shijonawate Gakuen Junior College

四條畷学園短期大学紀要 第49号 別刷

平成28年5月31日

保育実習Ⅱの「振り返り」と「課題」についての一考察

長谷 秀揮 *

A Study of the “challenge” and “look back” of learning in child care and education training Ⅱ

Hideki Hase

本稿の目的は保育実習Ⅱを通しての実習生の気づきや学びに着目し、保育実習Ⅱを修了した学生が、実習の振り返り及び自己評価と反省の中で捉える保育者としての自分自身についての課題や改善点、また問題点を明らかにすることにより、事前及び事後の保育実習指導のより良い在り方や改善点等を探ることに資することである。さらには実習指導の内容と質の充実、すなわち保育実習指導Ⅱの授業の一層の充実と改善向上に繋げていくことである。具体的には、実習生に対する実習事後指導の一環として実施した、実習の振り返りの中での自己評価質問紙調査における実習生の記述を精査し、実習において評価できる点や反省すべき点等の自己分析諸点について、そしてまた同様に保育者としての課題や改善すべき点等について分類整理して分析及び考察を加えることであり、さらには保育実習指導の充実向上に繋がるように今後の課題と展望を探ることである。

Key words: 振り返り、自己評価、事後指導、保育技術、課題と改善点

1. はじめに

本学においては保育士資格の取得を目指す学生は、「保育実習Ⅰ（４単位：保育所実習２単位・施設実習２単位）」を１年次に経験したうえで、「保育実習Ⅱ（２単位：保育所実習）」もしくは、「保育実習Ⅲ（２単位：保育所以外の施設実習）」を２年次に履修することが必要となる。そして、これは他の養成校でもほぼ同様の状況であると思われるが、保育所（園）もしくは幼稚園を就職先として希望する学生が多いこともあり、２年次に保育実習Ⅱを選択し履修して、保育所（園）に実習に行く学生が本学でも多数を占めている。

保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの共通項、及び差異については、「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」（平成１５年１２月９日 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知）の別紙３「教科目の教授内容」において、それぞれの「目標」と「内容」（保育実習特：「保育所実習の内容」）として明確に示されている。そこでは保育実習Ⅰで、「保育所、児童福祉施設等の役割や機能を具体的に理解す

る」、「…子どもの保育及び保護者への支援について総合的に学ぶ」、「保育士の業務内容や職業倫理について具体的に学ぶ」等とされ、基本的で具体的な理解や学びを目標としていることがわかる。そして、これに対して保育実習Ⅱでは、「保育所の役割や機能について具体的な実践を通して理解を深める」、「…保育実習Ⅰの経験を踏まえ、子どもの保育及び保護者支援について総合的に学ぶ」、「保育士の業務内容や職業倫理について具体的な実践に結びつけて理解する」等とされている。さらに保育実習Ⅱの「目標」の最後には、「保育士としての自己の課題を明確化する」と明記し、保育実習Ⅰとの差異を際立たせているのがわかる。

つまり、『保育実習Ⅰ（保育所）』と『保育実習Ⅱ』の共通項は、実習生が保育所で日々営まれる保育、いわゆる通常保育と呼ばれる活動に参加すること¹⁾であり、そして差異については、『保育実習Ⅰ（保育所）』は、保育所で生活を営む乳幼児への理解と保育所の機能やそこで働く保育士の職務について学ぶことをねらいとしているが、『保育実習Ⅱ』では、それらをふまえたうえで、実習経験の集大成である指導実習を行なう²⁾ことであり、さらにま

* 四條畷学園短期大学 保育学科

た、「家庭と地域の生活実態にふれて、子ども家庭福祉ニーズに対する理解、判断力を養い、子育てを支援するために必要な能力を養うところまでの水準が求められている」³⁾とところにあるといえよう。

保育実習Ⅱは、本学では2年次の12月に実施しているため、短大における学生時代最後の実習となる。

その貴重な経験の機会である実習において、学生は保育に必要な様々な技術を学ぶだけではなく、保育や幼児教育についての、そして子どもや子育てについての捉え方や考え方であるいわゆる保育観や子ども観など、またさらには乳幼児及びその保護者を対象とする保育者という対人援助職についての捉え方や考え方である保育者観についても、子どもや保育者、そして保護者と実際に関わることを通して認識を新たにし学びを深めることができるのである。保育を学ぶ学生にとっては、まさしく得難い経験の宝庫といえるのである。その保育所実習と事後の振り返りを通して気づくことができ、また学ぶことができた多くのことは、保育者としての貴重な経験となり、そして改めて保育者としての自分自身の課題として明確に捉えることができるのである。

2. 研究の目的

保育実習Ⅱの事後指導の中で実施した実習の振り返りのための実習自己評価票における課題や改善点に関する記述及び、自分自身で実習を振り返ってみての実習での評価する点や反省点についての記述について着目しカテゴリー化して分析し、そして考察を加えて、実習生が実習を振り返って保育者として必要であると捉えた自分自身の今後の課題や問題意識を明らかにすることにより、保育実習指導Ⅱの授業と保育実習Ⅱを含めた実習生に対する指導と援助の内容の一層の充実、改善向上に繋げていくことを研究の目的とした。

3. 研究の方法

対象：保育実習Ⅱ（保育所）の参加者 83 名

実習時期：平成 27 年 12 月

研究の概要：保育実習Ⅱの終了後に参加学生が作成した実習の自己評価質問紙の3つの項目（1）今回の実習において評価できるところ、頑張ったところ、など（2）今回の実習において評価できない

ところ、反省点、など（3）今回の実習で明らかになった自分自身の課題、今後改善すべきところ、などについての記述を、KJ法を用いて整理分類してカテゴリー化し分析及び考察を加えた。

4. 結果と考察

〔1〕調査項目（1）について

学生が実習事後指導の中で作成した自己評価質問紙調査票（83名の学生が回答：回収率100%）における項目（1）の、保育実習Ⅱにおける実習生としての自分自身を振り返って、評価できる、良かった、頑張った、等のプラス評価できる諸点（学生には3つの点について記入を求めた）についての具体的な記述をカテゴリー化し整理分類すると、次のような結果になった。

（1）大項目と記述数〔総合計 264〕について

- I「保育の技術」〔合計 124〕
- II「保育や実習に対する姿勢や構え」〔合計 116〕
- III「保育の要点や留意点等について」〔合計 10〕
- IV「子ども理解について」〔合計 8〕
- V「その他」〔合計 6〕

（2）小項目と記述数

I「保育の技術」〔合計 124〕に関して

- ①子どもとの関わり方〔48〕
- ②設定保育〔18〕
- ③絵本の読み聞かせ〔15〕
- ④子どもへの言葉かけ、声掛け〔14〕
- ⑤記録・指導案〔12〕
- ⑥ピアノ〔9〕
- ⑦手遊び〔5〕
- ⑧エプロンシアター〔2〕
- ⑨その他〔1〕
 - ・制作〔1〕

II「保育や実習に対する姿勢や構え」に関して

〔合計 116〕

- ①積極性〔31〕
- ②体調管理〔17〕
- ③質問〔15〕
- ④挨拶〔14〕
- ⑤笑顔〔13〕
- ⑥勤務状況〔8〕
- ⑦機敏に動く〔7〕
- ⑧保育者との関係〔6〕
- ⑨言葉づかい〔3〕
- ⑩その他〔2〕

・教わった事を直ぐに実践 [1]

・実習を楽しんだ [1]

Ⅲ「保育や実習の要点や留意点等について」

[合計 10]

①子どもの名前を覚える [3]

②教材研究 [2]

③トラブルやケンカへの対応 [2]

④年齢や個人に合わせた対応 [2]

⑤その他 [1]

・人見知りの子どもの関わり [1]

Ⅳ「子ども理解について」 [合計 8]

①子どもの発達段階の理解 [5]

②一人ひとりの性格を理解する [2]

③その他 [1]

・子どもの気持ちに寄り添い共感 [1]

Ⅴ「その他」 [合計 6]

・おむつ交換（便の始末）がうまくなった [1]

・食事の援助を頑張った [1]

・お餅つきの手順がうまくなった [1]

・生活発表会に参加できた [1]

・生活発表会で使う飾りなどを作って、ほめていただいた [1]

・子どもを引き付けるものがあり、子ども好きが伝わってくるとほめられた [1]

(3) 項目 (1) に関する考察

保育実習Ⅱにおいて、実習生としての自分自身を振り返ってみて、評価できる、良かった、頑張った、等のプラス面として評価できる諸点に関する記述については、「保育技術」に関して評価するとして捉えている学生が全体の約 47%と過半数近くになり最も多かった。

その中でも、保育技術の小項目「①子どもとの関わり方」と、「④子どもへの言葉かけ、声掛け」は、それぞれ保育技術においての割合が、約 39%と約 11%となり、両者の合計で保育技術の約 50%を占める結果となった。特に、①子どもとの関わり方はほぼ 4 割という結果で、学生の評価できる諸点の全体の中でも際立っている。このことは実習における一つのポイントが、子どもへの関わり方であると学生もよく認識できていることの表れであるといえる。そして重要なポイントとしてよく理解することで学生自身も実習及び、実際の保育における一つの大きなテーマであるとの捉えが出来

ているともいえる。

今回の実習では、2 年次生であり保育者を目指す学生として最後の実習でもあるので、実習期間中に乳児クラスにおける実習を必ず経験することを、大きな一つの目標として実習生に意識させるようにした。そうした中で、実際に 0 歳児や 1 歳児の子どもと関わり、言葉かけはもちろん触れ合い遊びによるスキンシップや手遊び、そして絵本の読み聞かせの大切さに気づいた学生も多い。さらに保育者は保護者と同様に、子どもにとって生活を共にする身近な大人であり、日常的な触れ合いの中で様々な生活様式や規範を学びとっていく模倣の対象でありモデルでもあるので、言葉遣いをはじめ全ての言動が、子どもに大きな影響を与えることの重要性や責任についても気づきや学びを深めた学生が多いと考える。

実習生にせよ保育者にせよ、また保護者においても、子どもと大人との関係は、言葉や身体的な触れ合い、また生活や遊び等の活動を共にすること等を通して結ばれていくといえる。保育実習Ⅱの期間は約 2 週間であり長くはないが、学生の関わり次第でしっかりと絆で結ばれた子どもとの信頼関係を構築することも可能であることを事前指導の中で理解できる様にして、実習における学びに繋げていけるようにしたいと考える。

⑤の「記録・指導案」については、其々の保育所での様式やルール、記入及び作成についての要領等があり、換言すれば其々の保育所での固有の記録や指導案作成に関する“文化”があるので、実際に繰り返し作成して、そして担任や主任保育士等の指導保育士から助言や添削指導をしていただいて、その繰り返しの中で作成の要点やコツをつかみ取って行くことが求められる。そして指導保育士とのやり取りがとても大切であり、やりとりの繰り返しによって気づきや学びが多くなり、かつ深まることを事前の実習指導では伝えているが、それ以前の段階というべき誤字脱字の多さや、文章表現の稚拙さを指摘されて反省し、自分自身の大きな課題であると改めて認識する学生もいる。

[2] 調査項目 (2) について

実習Ⅱを修了した学生が事後指導の中で作成した自己評価質問紙調査の項目 (2) の今回の実習において評価できないところ、反省点等のマイナス

評価の諸点（学生には3つの点について記入を求めた）についての記述をカテゴリー化し整理分類すると、次のような結果になった。

（1）大項目と記述数〔総合計 227〕について

- I「保育の技術」〔合計 107〕
- II「保育や実習に対する姿勢や構え」〔合計 90〕
- III「保育の要点や留意点等について」〔合計 12〕
- IV「子ども理解について」〔合計 9〕
- V「その他」〔合計 9〕

（2）小項目と記述数

I「保育の技術」〔合計 107〕に関して

- ①設定保育 [31]
- ②ピアノ [17]
- ③日誌、記録 [16]
- ④子どもとの関わり方 [14]
- ⑤子どもへの言葉かけ、声掛け [13]
- ⑥絵本の読み聞かせ [5]
- ⑦手遊び [3]
- ⑧指導案 [2]
- ⑨子どもたちをまとめる [2]
- ⑩視野を広く [2]
- ⑪その他 [2]
 - ・安全面への配慮 [1]
 - ・ダンスの教え方 [1]

II「保育や実習に対する姿勢や構え」に関して
〔合計 90〕

- ①意欲、積極性 [27]
- ②体調管理 [25]
- ③質問 [17]
- ④出勤（遅かった、ぎりぎり等） [7]
- ⑤保育者との関係 [5]
- ⑥事前準備 [4]
- ⑦笑顔 [2]
- ⑧機敏に動く [2]
- ⑨その他 [1]
 - ・字の丁寧さ [1]

III「保育の要点や留意点等について」〔合計 12〕

- ①子どもの名前を覚える [5]
- ②教材研究 [2]
- ③その他 [5]
 - ・子どもへの言葉づかい [1]
 - ・自由遊びの時の立ち位置 [1]
 - ・子どもの叱り方 [1]
 - ・適切な動き [1]

・表現力 [1]

IV「子ども理解について」〔合計 9〕

- ①子どもの発達段階の理解 [7]
- ②その他 [2]
 - ・子どもの質問に答える [1]
 - ・子どもとの約束 [1]

V「その他」 [9]

- ・理解力不足 [1]
- ・探究心が足りない [1]
- ・ノートを整理する力 [1]
- ・メモの取り方 [1]
- ・楽しめなかった [1]
- ・感情が薄い [1]
- ・座り方 [1]
- ・給食を早く食べる [1]
- ・日誌提出のタイミング [1]

（3）項目（2）に関する考察

項目（2）の中で最もマイナスの評価が多くなった項目が「保育技術」であり、そしてその中でも、「①設定保育」が、とりわけ多い結果となった。設定保育については1年次の保育実習Ⅰで取り組んだ学生が多くいて、また2年次生の9月に参加した幼稚園での教育実習においても取り組んだ経験があるので、ある程度は見通しをもって計画的に準備することが十分可能であると考えられる。しかし実際は、教材研究を含む細かなところの準備不足や、予想される子どもの活動に対しての言葉かけや、また働きかけの対応を具体的に考えておくことや、設定保育の導入や展開、そしてまとめについての事前のシュミレーションの不足等が、このような結果につながっていると考えられる。

設定保育の準備で最も肝心な保育指導案については、前述したようにクラス担任や指導保育士と繰り返しやりとりをしながら、案を練っていくようにするならば完成度の高い具体的で実際の指導案を作成する事が、実習生でも十分可能であるのだが、時間的な、また精神的な余裕が実習生に無いこともあり、不完全なままの指導案となってしまっている現状があると考えられる。この点については、保育現場における保育の質にも少なからず関わってくることでもあるといえるので、保育実習を通じて保育現場と養成校の協働により、質の高い保育者の養成を行うという共通認識のもとに保育実習Ⅱのねらいや目標ともリンクさせな

がら、実習生を受け入れてくださっている保育所側とコミュニケーションをよく取り合って、質の高い保育者の育成に繋げるべく、問題点を共有し改善していくことが必要であると考えます。

「②ピアノ」については、保育技術の中でも最も個人差が大きく、またその技量の差異が客観的にもはっきりと判り易いスキルであるが、今回の調査結果で2番目にあげられていることについては、学生の日頃の練習不足、すなわち自らの努力不足が否めないといえる。ピアノは設定保育と同じように、事前の準備が十分に可能であり、日頃の練習や鍛錬の積み重ねの結果がそのまま出てしまうものであるため、多くの実習生に猛省を促すことが必要であろうと考える。そして今後の取り組みとしては、音楽担当の教員と連携しながら、保育実習指導Ⅱの授業でもピアノの重要性和日々の努力の大切さを繰り返し強調していきたいと考える。

大項目Ⅱの「保育や実習に対する姿勢や構え」に関しての小項目の記述については、「①意欲、積極性」についてが、最も多く計27の記述となった。これは項目(2)の記述全体の約12%を占めることになる。本学の学生の全体的な傾向として真面目で誠実である反面、意欲や積極性に欠ける部分がある、との保育現場の園長先生方のご指摘ないし評価が毎年度多くあり、その為そのことを受けて実習指導の授業でも、またガイダンスにおいても、実習においては意欲や積極性を前面に出すことを心がけるようにと、繰り返し伝えてきたこともあるので残念な結果となった。学生一人ひとりに丁寧にかつ十分に関わり、学生の实習に関しての自己肯定感や自信をしっかりと育み、そして意欲や積極性に繋がっていくような取り組みを一層強化して行きたいと考える。このことは学科全体の課題であるともいえるので他の教員とも課題として共有し、互いに知恵を出し合って様々な角度から取り組んでいきたい。

[3] 調査項目(3)について

今回の実習で明らかになった自分自身の課題、今後改善すべきところ、等について(学生には3つの点について記入を求めた)の具体的な記述をカテゴリー化し整理分類すると、次のような結果になった。

(1) 大項目と記述数[総合計245]について

- I「保育の技術」[合計108]
- II「保育や実習に対する姿勢や構え」[合計58]
- III「保育の要点や留意点等について」[合計48]
- IV「子ども理解について」[合計20]
- V「その他」[合計11]

(2) 小項目と記述数

- I「保育の技術」[合計108]に関して
 - ①子どもへの言葉かけ、声掛け [41]
 - ②ピアノ [16]
 - ③子どもとの関わり方 [15]
 - ④記録・指導案 [10]
 - ⑤設定保育 [7]
 - ⑥絵本の読み聞かせ [7]
 - ⑦子どもたちをうまくまとめる [5]
 - ⑧手遊び [3]
 - ⑨表現力 [3]
 - ⑩その他 [1]
 - ・引き出しを増やす [1]
- II「保育や実習に対する姿勢や構え」に関して [合計58]
 - ①積極性 [19]
 - ②体調管理 [14]
 - ③保育者との関係 [6]
 - ④笑顔 [3]
 - ⑤言葉遣い [3]
 - ⑥質問 [2]
 - ⑦挨拶 [2]
 - ⑧勤務状況 [2]
 - ⑨機敏に動く [2]
 - ⑩保護者との関係 [2]
 - ⑪その他 [3]
 - ・提出物を決められた日時に出す [1]
 - ・ふさわしい身だしなみ [1]
 - ・保護者の目、保育者の目、子どもの目を意識する [1]
- III「保育や実習の要点や留意点等について」 [合計47]
 - ①視野を広くし全体を見る [9]
 - ②年齢や個人に応じた対応 [8]
 - ③トラブルやケンカへの対応 [7]
 - ④準備や見通し、計画性 [6]
 - ⑤安全面への配慮 [4]
 - ⑥教材研究 [3]
 - ⑦子どもの行動を予想する力 [2]

⑧トラブルやケンカへの対応 [2]

⑨年齢や個人に合わせた対応 [2]

⑩その他 [4]

- ・子どもの叱り方 [1]
- ・子どものケガへの対応 [1]
- ・保育者の行動を真似る [1]
- ・探求心 [1]

IV「子ども理解について」[合計 20]

①子どもの発達段階の理解 [13]

②一人ひとりの性格を理解する [2]

③子どもの気持ちに寄り添い共感する [2]

④子どもの様子をよく観察する [2]

⑤その他 [1]

- ・子どもと一緒に楽しむ [1]

V「その他」[合計 11]

- ・メンタルの弱さ [2]
- ・理解力 [1]
- ・判断力 [1]
- ・応用力 [1]
- ・説明力 [1]
- ・人見知りを直す [1]
- ・何事も丁寧に行なう [1]
- ・切り替えを早くする [1]
- ・給食を早く食べる様にする [1]
- ・当たり前のことは確実に出来る様にする [1]

(3) 項目 (3) に関する考察

保育実習Ⅱの振り返りを通して今回、実習生が自分自身の課題及び、今後改善すべきところ等として挙げた諸点の中では、全体の中でも約 44% (合計 108) と多数を占めた、大項目Ⅰの「保育の技術」に関する小項目の「①子どもへの言葉かけ、声掛け」が最も多い結果となった。記述数は計 41 であり、保育技術の中での割合も約 38% となっており、多くの学生がこの点について、自分自身の課題や改善点として捉えていることが明らかになった。「②ピアノ」の次に課題として多く学生によって挙げられている「③子どもとの関わり方」と、この「①子どもへの言葉かけ、声掛け」は、リンクし密接に関係していると考えられるので両者をセットで一体的に捉える視点も必要であると考えられる。この 2 点を合わせると合計 56 の記述となり、保育技術の中での割合が約 52% と、過半数を超えることになる。このことは今回の実習では、特に 0 歳児や

1 歳児、そして 2 歳児の子どもたちのクラス、いわゆる乳児クラスでの実習を学生に促し、幼児クラスに比べいっそう保育者の配慮や個別の関わり、そして細やかな援助が大切になる乳児クラスでの実習経験を積み重ねることを推奨するようにしたことにも影響していると考えられる。つまり 3 歳児以上の幼児クラスにおける実習であるなら、日常的な会話や意思疎通といった子どもとのコミュニケーションの方法は、大人と対する時とあまり変わらない言葉かけや関わり方で問題はほとんどないといえるが、その反面、乳児クラスでは全く勝手が違ってくことになるからである。具体的には乳児との関わりの中では、…とりわけ喃語や一語文段階の 0 歳児とのコミュニケーションはそうであるが…、子どもの快、不快や喜怒哀楽といった情動や気持ち、また情緒や子どもが言わんとする事などを、保育者が汲み取って代弁したり、子どもの様子や表情から察して言葉に表してやったり、また子どもの言葉をそのままオウム返し的に繰り返して子どもに返して確認したり、共感したりなどを日常的に行うことが必要となる。

そのような乳児クラスにおける実習を経験した学生の多くが、自分自身の課題として子どもへの言葉かけ、声掛けと、子どもとの関わり方を挙げているのではないかと推測できる。乳児でも 0 歳児の子ども、つまりいわゆる赤ちゃんとの触れ合いや関わりを日常的に経験として積み重ねることは、今の時代の学生には難しいことであるので、実習の事前指導の中で教員の側が、その点を念頭に置き配慮するようにして、乳児保育の要点や乳児との触れ合い遊びそしてわらべうた遊び等の実技についても具体例を絞りこんで分かり易く紹介していくように留意したい。

「②ピアノ」や、「④記録、指導案」の作成については、保育技術の中でも学生が自分自身で計画的に取り組んだり繰り返し練習したりするとが、比較的容易であるといえるので、実習指導とリンクさせながら、一人ひとりの学生に、それぞれの目標や達成の目安を立てさせて、継続的に取り組むように促し見守っていくようにしたいと考える。そして個々人の目標に向けての取り組み、努力の過程をいわゆるスモールステップで可視化するようにして、音楽担当の教員とも連携をはかりながら学生をフォローアップしていくようにしたい。

大項目Ⅱの「保育や実習に対する姿勢や構え」に関しての小項目の「①積極性」に関しての記述は、計19であり、83名の実習生全体からみた割合は約23%と、少なくない比率となる。前述している様に保育実習Ⅱは、初めての实習ではないので自信を持って子どもに関わり、担任や指導保育士に対しても自分から進んでコミュニケーションをはかるようにして取り組んでいって欲しいと考える。その為にも、より具体的で実践的な事前指導になるように、さらなる授業内容や方法の改善、工夫に努めていきたいと考える。

同じく「②体調管理」に関しては、睡眠不足や疲労からの体調不良や発熱等による欠席は、実習の成績評価に直結することを学生によく認識させ、日頃からの早寝早起きなどの生活リズムの改善や維持を図ること、また健康的なバランスの取れた食生活を心がけること等が、体調管理には大切であることを繰り返し伝えて理解させていくようにしたい。また併せて、欠席すると実習の延長が必要になり、実習先にも負担をさらにお掛けすることになることや、何よりも保育現場では子どもたちと日常的に向かい合い接するので、保育者には第一義的に心身の健康が求められることを、十分かつ深く認識できるように学生に実習指導を通して強調したいと考える。

大項目Ⅲの、保育や実習の要点や留意点等に関する小項目の「①視野を広くし全体を見る」については、壁を後ろにして立つ様にしたり、常に広角的に子どもたちを視野に入れることを心掛けたりなど、シチュエーションに応じて自分自身の立ち位置や身体の向きを変化させて、その場の状況に合わせていくことが実習生や保育者に求められることになる。これは子どもの集団を保育することの経験を積み上げることによって身につく部分も多くあり、何よりその場の保育者同士の連携による役割分担が前提になることであるので、子どもの状況把握と安全確保を共通認識として保育者間でよくコミュニケーションをとることが求められる。新規採用の保育者が保育のイロハとして先輩保育者から保育の現場で教授される保育実践の基本の一つであるといえる。

「②年齢や個人に応じた対応」や、「③トラブルやケンカへの対応」についても全く同じであるといえる。つまり保育現場において、子どもや先輩

保育者の様子をよく観て、実際に関わり対応し、そして繰り返し同様の経験を積み重ねていくことになる近道になるのである。その際には子どもの気持ちや心情を大切に尊重し、子ども心に寄り添いながら関わり対応することが最も肝要になることはいうまでもない。

5. 今後の課題と展望

今回の研究は、前回の保育実習Ⅱについての学生の学びについての調査研究と比較して、さらに詳細な内容の調査研究を自己評価の質問紙に着目して行ない、より具体的に学生の捉える保育者としての課題や改善点を探り把握するようにした。そのように意図しながら保育実習Ⅱの実習事後指導における自己評価質問紙による振り返りの結果を分類し整理して分析及び考察をおこなったが、その際の自己評価質問紙は実際に保育実習成績評価票として各保育所にお渡ししている様式をベースに作成している。これについては、実習生の「実習中の実習内容についての『自己評価チェックリスト』⁴⁾として例示している文献や、自己評価チェックリストと自己課題改善ワークシートを一体的にひとつの様式にしているようなテキストもあるが、今回は学生が事前指導でも目にしていいて馴染みがあり、また項目数も少ない為に記入しやすいと考え採用した。

自己評価を行うことにより学生は現在の自分自身の到達点や保育者としてできていること、良さを認識することができ、そしてまた今後の課題や改善点を自覚することができる。それゆえに簡潔かつ要点をしっかりと振り返って自己評価し、良い点は強みや自信につなげ、そして課題や改善点は一つ一つクリアしていくことで自分自身の成長に繋げていくことが、自己評価については肝要であると考えられる。

そして自己評価の結果についての自己分析と客観化、そしてまたそれをベースにしてのグループでの実習の振り返り討議や学びや気づきの共有、さらに成績開示及び必要に応じての個別の事後指導を踏まえて、『保育者としての課題と抱負』をテーマとする課題レポートの作成に繋げていくことを、実習事後指導及び保育実習指導Ⅱのまとめとした。課題としたレポートにおいては、保育実習

はまさに全人教育であると呼ぶにふさわしい、学生の人間的な成長を実感として捉えることができる記述内容も少なからず読みとることができるが、その中で浮かび上がってくる学生が目標とする具体的な保育者のイメージや目指す保育者像に関しては、今後の研究課題の一つとしたいと考えている。

本学の保育学科では幼稚園教諭2種免許と保育士資格に加えて、こども音楽療法士資格や幼児体育指導者資格の他、計7種の保育関連資格を取得可能であり、それ故に学習意欲の旺盛な学生が多数入学してきている。しかしその反面、学力が十分あらかつ意欲的、積極的である学生ばかりではなく、当然のことながら学力が比較的低レベルの学生や、目的意識が希薄でモチベーションが高くない学生等もいて、いわゆる学生の多様化が進んでいる現状がある。そのような中で教員は、実習委員会をはじめ学科をあげて協力体制を組み、全力で学生をサポートしバックアップして保育実習という貴重な学びの場に学生を送り出すように尽力している。保育を学び、保育者を目指す学生の質は、すなわち保育者の質にストレートに結びつくということは、いうまでもないことである。それゆえ養成校と保育現場とが、相互にさらにもう一步踏み込んだ形で密接に連絡連携をはかり、質の高い保育者を現場と養成校とが協力協働して育成するというミッションと目標を再認識し、そしてそのことの意義と重要性を改めて共有することが実習生を送り出す側と受け入れ側の双方に求められていると考える。

また本学においては、本学ならではのオリジナルな指導方法及び内容の一つとして、素敵な保育者を“なわてジェンヌ”と銘打って、保育者としての目標ないしは理想像として学生に提示しイメージさせ、そしてその目標に向けて1年次の4月から、1. 幅広い教養、2. 豊かな保育技術、3. 確かなマナー、を大きな3つの柱とし、それらを一人ひとりが学び、身に着け、習熟できるように、講座「ステージアップセミナー」として、授業に準ずる形で取り組んでいる。そこでは2年次の保育実習Ⅱも視野に入れつつ、1年次生の当初から質の高い保育者を養成するために講座担当をはじめクラス担任も含めた学科全体の教員が一体となり連携しながら、それぞれ役割を分担し総力

を結集して取り組みを進めているのである。今回の調査研究において明らかになった、学生が保育実習Ⅱの振り返りの中で課題や改善点として挙げた諸々の点については、このステージアップセミナーの3つの大きな柱とリンクし重複する部分が多くあることが分かる。それ故この講座の一層の活用も視野に入れ、1年次生の入学時から卒業までの期間全体を見通しての一貫した養成体制をより充実したものとしたいと考える。その為にも、まず実習指導を行なう実習担当教員が、率先して現状を振り返ってみて授業の計画や内容、そして毎回の授業の目標や組み立てなどを、さらに改善向上させグレードアップさせていくように努めたい。具体的には授業計画をより詳細かつ具体的なものとし、授業のガイダンス時に学生に配布説明し、毎回の授業の要点やポイントを事前に明確に示すようにして、学生が目あてを持ち毎回の実習指導の授業に臨めるようにすることを課題としたい。

また、実習個別面談の活用とその内容の充実にしても、事前と事後の面談を関連づけることをより意識して実施するようにしたり、1年次の個別面談時の記録や内容を2年次の面談に活かしたり、一部をデータ化して1年次と2年次の学生の伸びや成長を確認したり、学生の自己有能感や自信、また保育者としての効力感を持ち深めるために活用したり、等に取り組んでいくことも今後の課題の一つとしたいと考える。

引用文献

- 1) 全国保育士養成協議会 編「保育実習指導のミニマムスタンダード」北大路書房 2007 58 頁
- 2) 同上 58 頁
- 3) 同上 59 頁
- 4) 待井和江・福岡貞子 編著
「保育実習・教育実習」ミネルヴァ書房 1997 101 頁

参考文献

- 1) 待井和江・福岡貞子 編著
「保育実習・教育実習」ミネルヴァ書房 1997
- 2) 小林育子・長島和代・権藤真織・小櫃智子 著
「幼稚園・保育所・施設 実習ワーク」萌文書林 2006
- 3) 山岸道子 編著
「保育所実習」ななみ書房 2007
- 4) 全国保育士養成協議会 編「保育実習指導のミニマムスタンダード」北大路書房 2007
- 5) 厚生労働省 編「保育所保育指針解説書」
フレーベル館 2008
- 6) 新保育士養成講座編纂委員会 編「保育実習－新保育士養成講座 第9巻－」全国社会福祉協議会 2011
- 7) 石橋裕子・林 幸範 編著
「幼稚園・保育所・施設 実習ガイド」同文書院 2011
- 8) 上野恭裕 編著
「プロとしての保育者論」保育出版社 2011
- 9) 長谷秀揮 著「保育実習における学生の学びについての一考察」日本保育学会第 66 回大会
発表要旨集 2013 818 頁
- 10) 小櫃智子・守 巧・佐藤 恵・飯塚朝子 編著
「幼稚園・保育所実習パーフェクトガイド」わかば社 2013
- 11) 内閣府 厚生労働省 文部科学省 編
「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説」
フレーベル館 2015
- 12) 松本峰雄 監修
「流れがわかる幼稚園・保育所実習」萌文書林 2015
- 13) 門谷真希・山中早苗 編著
「保育の指導計画と実践 演習ブック」
ミネルヴァ書房 2016

－ 2016. 3. 22 受稿、2016. 3. 24 受理－

A Study of the“challenge”and“look back”of learning in child care and education training Ⅱ

Hideki Hase

Shijonawate Gakuen Junior College

The purpose of this paper is to focus on the apprentice of awareness and learning through the child care training Ⅱ, students who have completed a childcare training Ⅱ is a challenges about myself as a caregiver to capture in the retrospective and self-evaluation and reflection of practice improvements, also by revealing the problems, etc. is to contribute to explore the pre-and better way and improvements such as the post of childcare training guidance. Further enhance the content and quality of training guidance, that is, that will lead to the improvement and further enhance the teaching of childcare training guidance Ⅱ. Specifically, it was carried out as part of the training post guidance for trainees, reviewing the description of the apprentices in the self-assessment questionnaire survey of in reviewing the training, of a point or the like to be and remorse that it can be evaluated in practice for self-analysis various points, and also it is to add a classification organize and analyze and discuss such issues and improvement to be a point of as caregivers as well, and even the future challenges to lead to substantial improvement of childcare training guidance it is to explore the prospects.

Key words: reflection, self-evaluation, post-guidance, child care technology, challenges and improvements